天台教学における地獄の問題

神 達 知 純

一、はじめに

天台教学では地獄といえは十界の一であることがまず想起されよう。中国において地獄に関するまとまった記述を持った経論は南北朝時代には多く訳出・撰述されており、まさに地獄の恐怖が語られていた時代に、智顗は独自の地獄観を持って十界互具等の思想を展開していたことが理解できる。筆者はかつて『摩訶止観』の叙述を手がかりに天台智顗の地獄観を論じた。^①本稿はそこで扱えなかった戒乗四句の所説とそこから派生する地獄に関する問題を採り上げることを眼目とする。

二、戒乗四句について

『摩訶止観』巻四上において、智顗は持戒も犯戒も不定であることを示すために、戒乗四句として知られる一説を出している。戒乗四句とは『涅槃経』の「於乗緩者乃名為緩。於

戒緩者不名為緩。」（大正藏二二・六四一中）という経文を四句に開いたものであり、戒乗俱急・戒緩乘急・戒急乘緩・戒乗俱緩の四をいう。このうち戒緩乘急については次のように述べられている。

二戒緩乘急者、是人德薄垢重煩惱所使。是諸事戒、皆為羅刹毀食、專守理戒觀行相續、如上覺意六蔽中用心。央掘示為其相。以事戒緩命終故、墮三惡道受於罪報。於諸乘中何乘最強。強者先牽。若析空乘強、以三途身值弥勒仏聞三藏經、乃可得道。若即空乘急、以三途身值弥勒仏聞般若方等得道。若即假乘急、以三途身值弥勒仏聞華嚴經、作利根得道。是故仏説漸頓諸經。龍鬼畜獸悉來会坐。即是其事。破事戒故受三惡身。持理觀故見仏得道。（大正藏四六・三九上）中

戒乗四句の場面で戒とは事戒、乗とは理戒を指している。事戒を持するということは人天の果報を受けることである。そのうち上品は天、中品は人、下品は修羅の果報を受け、ま

た下品を犯したときには修羅の果報を失い三惡道に入る。三惡道にもまた三品あつて、軽い者から餓鬼・畜生・地獄の道に入るといふ。戒緩の者が三惡道に墮するのはそのような理解に基づく。一方、理戒を持するといふことは仏に見え法を聞き得道するという意義を持つ。これは空仮中の三品に約して説かれ、さらに即中・即仮・即空・析空にまた上品・中品・下品があり、声聞から仏に至るまでの階位が詳説される。⁽²⁾

三、戒緩乘急をめぐる問題

戒乘四句は智顗がしばしば用いるところで、『法華玄義』『法華文句』『維摩經文疏』等にもその用例が見られる。ところで戒緩乘急の者は、戒が緩であることから命終に三惡道に墮すが、乗が急であることによつて、乗の異なりこそあれ、三途の身をもつて弥勒仏に見え法を聞き得道するとされてゐる。三惡道に墮する、また三途の身を受けるといふことは、先述の通り、餓鬼・畜生のみならず地獄に入ることをも意味している。この戒緩乘急をめぐるのは、古来、天台論義の一題目にもなつてゐるのだが、いくつかの問題が存在する。証真的の『玄義釈籤私記』および大宝の『玄義釈籤講述』を参照しつつ、その問題点を整理すると次のようになる。

①『法華文句』における戒乘四句は『法華經』序品の大眾を解釈する箇所において、天人龍鬼が皆、仏に見え法を聞いて

いるのに、こゝでなぜ地獄と無色界が列挙されていないのかという問いに対する答として展開している。こゝで三途の身といふのは餓鬼・畜生を指しており、地獄は除外して考えるべきではないのか。

②たとえば『大智度論』卷三十九には次のような問答がある。問曰。若爾者地獄衆生有得道者不。答曰。雖不得道種得道善根因縁。所以者何。以重罪故不応得道。(大正藏二五—三四四上)これは地獄の苦は非常に重く、そもそもそこに得道の機はないという理解がある。そのような理由から三途の身をもつて弥勒仏に値い得道することはあり得ないのではないかと。

まず①の問題について、『維摩經文疏』『仁王般若經疏』においても天台は説法の会座に預かる大眾の解釈に戒乘四句を用いてゐる。そのうち『法華文句』の叙述を検討する。

問。天人龍鬼皆見仏聞法。地獄一道無色一界何意不列。

答。(以下、戒乘四句が説かれるが略す)此文不列地獄者、以其戒緩苦重報隔上乘又緩、不能於法華見仏聞法。余經有列者余乘急耳。(大正藏三四—二六上丁中)

こゝではやはり戒緩乘急の者が三途の身をもつて法を聞くことが明かされてゐるのだが、「三途の身」と言い、畜生・餓鬼のみを指し、地獄は除かれてゐると解釈されてゐる。確かに先の『摩訶止観』においても「龍鬼畜獸も悉く來会し坐せり」とあり、こゝでも地獄は列挙されていない。地獄が除か

れているのは、乗という点で「上乘もまた緩」という理由であり、法華の会座には列ねないけれど、他の經に列ねられている可能性を示唆している。

大宝はこの件に関して二つの見解を示す。一つは地獄界に一乗の機がないということであり、これは『法華文句』に基づいている。二には湛然『法華文句記』卷二下の記述に依り、翻訳者が省略した可能性を指摘したものである。

次に②について、『大智度論』卷十に「三惡道亦有受道。福少故言無。」（大正藏二五—三五下）とあり、三惡道もまた得道することが同論にすでに述べられている。智顗もまた『維摩經文疏』卷五に三惡道の得道に言及している。

また特に地獄の得道に関しては、『大智度論』卷三十九の記述^⑥に基づいて鬼畜二道の得道と比して、地獄を不得と論じているのであると大宝は述べている。ただし「ただ地獄の依身は障道重きを以ての故に、この事は稀なり」という見解をまた示している。この見解は地獄の衆生に得道の機があった場合も、その依身をもつて得道することはなく、まずは人天等の余趣に果報を受けるのではないかということから導き出されている。その点に関して、たとえば智顗は『維摩經文疏』卷五に次のような経証を挙げている。

* 說大方等陀羅尼時、婆數從地獄出、將諸罪人共來聽法。又諸餓鬼衆亦來聽法。* 仏說大涅槃經、種種諸鬼神鳥獸等悉來。* 又大

品仏放光地獄、即得捨地獄身生六欲天、來下聽法。皆是往昔戒緩乘急。（新統藏一八—四九二上、*は筆者が付した）

ここで諸々の罪人とともに地獄より出でた婆數と、地獄の身を捨て六欲天に生じ法を聞いた者と、余趣に果報を受けて得道するの可否かという点で異なるが、智顗の場合、その相違は意識されていないように思われる。

大宝は、地獄の報命を尽くさずに地獄を出た婆數について「感応の因縁、珍事有らしむ」と述べている。『玄義釈籤講述』にたびたび指摘されているように、もし単に業道を論ずるならば、罪業によってしかるべき果報を受けることになるが、感応という思議し難い因縁は時に三途の身をもつて得道するということを起こさせるという。

仏と衆生の感応という関係について、智顗は『法華玄義』卷六上、感応妙を説く箇所^⑦に衆生の「機」の字義を「微」と解釈し、まさに生じようとしている善のみならず、生じる可能性がある善を機と規定している。そして、地獄の衆生の機に関しては次のように説明を与えている。

一機微妙者、如樂間地獄。此樂間微善。故立世毘曇云。人養六畜飲飴溫清者、在熱地獄得冷間、寒地獄得溫間。若從此義、樂間得論十法界機。阿鼻無樂間則無事善。云何具十。然阿鼻有性善不斷故。又近世雖無事善遠劫或有。惡強善弱冥伏未發。若遇因緣發亦何定。是故阿鼻得具十機。（大正藏三三—七四九中）

証真はこの叙述を「闡提に約す」としているが、阿鼻地獄にも十法界の機を具することがここに明らかにされている。確かに阿鼻地獄では修善の間断もないことになるが、性徳の善と遠劫の善があることから、冥伏しているとはいえず、因縁によって善を発する可能性があることを示唆している。

このような衆生の機に対して仏の応があり、地獄の果報を離れるという利益を得るのであるが、『法華玄義』巻六下、功德利益妙を説く箇所には次のように述べられている。

初入初出、両時可化。其中罪人、宿世善根可發閑宜、而為聖人赴対応之。或蒙光照。或注雨滅火。或調達婆數開示說法。熱悶難醒身体清涼。獲冥顯兩益、諸苦得息。(大正藏三三—七五八下)

「初入初出の両時に化すべし」とは断善根の者が地獄に善を生じる時節に言及したもので、そのような罪人であっても聖人の応によって冥・顯の利益を得る。智顗の理解によれば、密かに法身に益されることを冥益、仏に値い法を聞き、現前に利益を得ることを顯益といひ、戒緩乗急に述べられているのは顯益についての問題であることがわかる。地獄の衆生として顯益を得るということは、調達や婆數の開示說法といった經論の説相を智顗が重んじた結果であるとも言えようか。

四、おわりに

本稿では特に戒乘四句を中心に智顗の地獄に関する記述を

たどりながら、それをめぐる問題について検討した。智顗の場合、仏と衆生との感應の関係を基本に、また婆數等に関する經証によりながら、地獄における衆生の機とその得道を論じていることが提示できたのではないか。参照した文献についてはさらに適当なものがあるかもしれないが、本稿は三大部を主に扱った論考であることをご了承ください。

1 拙稿「天台智顗の地獄観」(天台学报第四十八号掲載予定)。

2 『摩訶止観』巻四上、大正藏四六—三七下—三八上

3 古宇田亮宣編『和訳 天台宗論議二百題』(昭和四十一年)、『地獄得道』の項(三九五頁)を参照。

4 『仏教大系 法華玄義第三』(一二〇—一二九頁)『同第四』(五四—五五、二二七—二四一頁)を参照。

5 「雖復難化仏、或至彼或攝到此。此經無者或略等耳。」(大正藏三四—一八五下)

6 「畜生道中当分別。或得者或不得者。如阿那婆達多龍王沙竭龍王等得菩薩道。鬼神道中如夜叉密迹金剛鬼子母等有得見道。是大菩薩。」(大正藏二五—三四四上)

7 『法華玄義』巻六上、大正藏三三—七四六下

8 『法華玄義』巻六上、大正藏三三—七四八中

〈キーワード〉 天台智顗、地獄、戒乘四句

(大正大学綜合佛教研究所研究員)

If Guanding had merely recorded lectures of Zhiyi, there would be no problem. However, Guanding interpolated his own ideas into his putative record of Zhiyi's exposition. This is particularly clear in the discussion of Hīnayāna. It is therefore dangerous to rely on these sources to approach Zhiyi's thought.

12. Problems about Naraka in Tiantai Doctrine

KANDATSU Tomozumi

In Tiantai doctrine, naraka is known as one of the ten realms of living beings (十界). In China many Buddhist scriptures that had a well-organized description about naraka had already been translated and written in the Northern and Southern dynasties. It follows that Zhiyi (智顗) developed ideas such as that each of the ten realms contains the other nine within itself (十界互具), in times when fear of naraka was common. In this report I take up some problems about naraka which are derived from the four-word phrase about Śīla and Yāna (戒乘四句) in “*Mohe Ziguān* (摩訶止觀)”.

13. Reconstruction of the *Jinzang lun* (fascicles. 5,6) by assembling Dunhuang Manuscripts

MIYAI Rika

The *Jinzang lun* 金藏論 — a kind of Buddhist encyclopedia — was compiled by Daoji 道紀 in the Northern Zhou period in China. It seemed that the *Jinzang lun* was lost in China, and the only manuscripts extant were fascs. 1-2 and the bulk of fasc. 6, which were in Japan. However, recently Dr. Arami Hiroshi 荒見泰史 discovered that there were pieces of the *Jinzang lun* in Dunhuang manuscripts. Then, when we investigated, we were able to find the following *Jinzang lun* manuscripts in the Dunhuang documents. Dunhuang A: B1322 (為86, BD3686) ・Д x00977 in Russia ・D156 in Beijing-University, Dunhuang B: B8407 (鳥16, BD7316), Dunhuang C: S3962, Dunhuang D: S4654, Dunhuang E: P3426, Dunhuang F: S779. Dunhuang A-D are equivalent to fascs. 5 and 6 of the *Jinzang lun*. From these and fasc. 6 in Kōfuku-ji 興福寺, we can reconstruct nearly the whole picture of fascs. 5 and 6